

西日本豪雨で被災した農業従事者の体験するインフラ・生活・こころの復興に関する質的検討

○進藤奈瑞菜・井谷渕真也・井谷ラファエル大輝・井尾上絢音
(香川大学大学院医学系研究科)

目的

災害後の生活再建は、被災者が新たな環境で生活を立て直す過程であり、「住まい」「つながり」「まち」「そなえ」「こころとからだ」など多面的要素から成る(田村他, 2000)。これまでの多く復興研究は都市部や震災被災地を対象としてきた。本研究では、西日本豪雨で被災した農村部 A 地区の農業従事者を対象に、生活再建過程におけるインフラおよび生活の再建と心理的回復の長期的変化の関連を明らかにする。

方法

本研究のフィールド 四国地方 A 地区。柑橘類の主要産地であり、2018 年 7 月 7 日に集中豪雨が観測され、人的被害や建物被害、断水が発生、農業用施設も甚大な被害を受けた。被災直後から住民の力で生活インフラの復旧を開始し、行政に積極的に働きかけ、災害ボランティアを積極的に受け入れてきた。

筆者の立場 被災 2 か月後から A 地区での活動を開始し、現在まで毎年 1 回以上、定期的に現地でボランティア活動を継続している復興ボランティア団体に所属し、5 年間で 8 回現地での活動に参加している。活動内容は、活動開始直後には農地や農道の土砂の撤去など復旧作業が主であり、時間の経過とともに農作業の手伝いも行うようになった。

調査協力者 2025 年 10 月現在、A 地区で筆者らの活動を継続的に受け入れている被災者 3 名。

手続き 復興曲線(酒井・渥美, 2020)とエピソード・インタビュー(Flick, 2007)でデータを収集した。本研究は、香川大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した(2025-153)。

結果

まず、3 名に共通して、①被災前からの地域の人間関係を活かして主体的にインフラを復旧し

たこと、②農業に着手できるようになった被災から 1 年後に主観的ストレスの減少を自覚したこと、③雨への恐怖心が和らぐことがこころの復興と対応していることが語られた。これらのことから、農業従事者のこころの復興は、地域のつながりを活かした主体的な復旧行動や、農業という生活基盤の再建と密接に関連していることが示された。

一方で、農業を再開できるようになった後の復興のプロセスには大きな個人差がみられた。A さんの事例では、1 年後頃から「園地が治ってきて、仕事ができるようになってきた」ことで徐々に落ち着いたものの、近くの川の進路が変わった影響で、現在も強い雨が降るたびに農園に水が流入していた。そのため、木の腐敗を防ぐための対策を迫られ、主観的ストレスが持続していることが語られた。それに対して C さんの事例では、被災 6 ヶ月後にみかんの収穫が再開できたことを契機に「だいたい落ち着きを取り戻し始め」、3 年後には農園の整備工事を「次世代へのステップ」と意味づけるようになり、被災前よりも農園が良くなっていると感じた時期から主観的ストレスが安定レベルに戻っていた。C さんは現在も整備工事を継続しており、農園の再建をポジティブに捉える段階へ至っていると考えられた。

これらの語りから、農業インフラの安定度や、再建過程をどのように意味づけるかによって、こころの復興の様相が異なることが示された。農業という生業の変化そのものが、生活の再建と自己の捉えなおしを同時に伴い、個別性の高い過程であり、インフラ・生活・こころの復興が多層的な過程であることが示唆された。さらに、本研究では、復興曲線とエピソード・インタビューの併用により、被災者自身がどの時点で回復を実感し、揺らぎを体験したかを時系列的に可視化でき、この方法が、復興過程の意味づけの変化を理解するために有用であることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました農業従事者の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

Figure 1. A さんの復興曲線

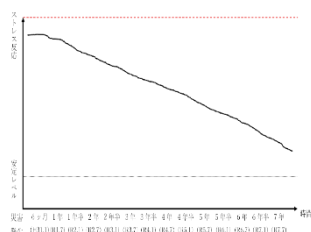


Figure 2. C さんの復興曲線

